

ココピートを用いた新しいフクシア用土の検討

太田美咲

はじめに

本園のフクシアは冷暖房が可能なフクシア温室で250品種を入れ替えながら周年展示している。フクシアの培養土はピートモスを主体としているが、コロナ禍で入手が困難だった時期もあったことから、ピートモスの代替品を検討することとした。今回はココピートという新しい土壌改良材を用いた土壌での挿し木育苗を試みたので報告する。

ココピートとは

ココピートとは、本来廃棄されるココヤシの実の繊維を加工して作った有機培土で、ピートモスに代わる環境配慮型の土壌改良材として、近年ヨーロッパやアメリカを中心に普及が進んでいる。

フクシアの用土

フクシアの挿し木用土には、通常無調整ピートモスを用いている（表1）。保水性が高く、乾きにくいことも多いため、表面に苔が生えたり、黒く泥状になったりすることで、フクシアの生育が悪くなることがある。ココピートはピートモスに比べ保水性は高いが排水性が良く、気相の確保に優れているとされているため、今回はピートモスをココピートに替えて生育を比較した。

栽培環境としては、冷房温室内で終日18(夜間)～25(日中)℃で管理した。置き場所は、15穴トレイに日当たり等の偏りが出ないように考慮して配置し、用土が乾いたら水やりを行った。

栽培してみても

ピートモスを用いた培養土に比べて挿し木をするときに固く感じたが、生育はおおむね良好であった。今回は‘スターウォーズ’、‘ミニローズ’、‘マゲラニカ’（黄葉タイプ）、‘エイドリアンバーガー’の4品種（1株につき挿し木7本、各2株）で比較した。‘エイドリアンバーガー’を除いた3品種では大きな差は見られなかったが（写真1、2、マゲラニカは写真なし）、‘エイ

ドリアンバーガー’のみ、ココピートを使用した用土の方が明らかに生育が良い結果となった（写真3）。排水性の良さに期待していたが、用土の乾き具合や灌水の頻度に大きな違いは見られなかった。土壌pHに関しては、ピートモスを使用した方が6.0、ココピートを使用した方が6.5と、どちらも適正範囲である6～7の範囲であった。

また、鉢増しの際には地上部の生育状況だけでなく根の張りも外から触って確認しているが、用土が固いため根の張りが分かりにくい点は、デメリットに感じた。鉢上げの際に目視した根の張り具合にも大きな差は見られなかった。

表1 フクシアの挿し木用土の構成

挿し木用土		
	材料名	使用量
	ピートモス	15ℓ
	もみ殻燐炭 (or ペラボンチャコール)	3ℓ
	カルエース	200g
	腐葉土 (フロンサイド入 10g/10L)	10ℓ
	赤玉土 (小粒 1袋)	15ℓ
	赤玉土 (中粒 1/2袋)	7.5ℓ
	ぼら細粒 (1/2袋)	9ℓ
	タチガレエース粉剤	50g



写真1 ‘スターウォーズ’
(左:ココピートを使用した用土 右:ピートモスを使用した用)



写真2 ‘ミニローズ’
(左:ピートモスを使用した用土 右:ココピートを使用した用土)



写真3 ‘エイドリアンバーガー’
(左:ココピートを使用した用土 右:ピートモスを使用した用土)

展望

結果として、ココピートを使用した用土の方が良く生育する株もあったが、変更に踏み切るほど決定的な差は生じなかった。今回は、予備的な試験だったのでサンプル数が少なく、ココピートの方が良く生育する株もあったが、これが再現性のある結果かどうかは今後の検討課題である。また、今回は挿し木苗用土だけで試したが、その後の鉢増し、定植後の生育についても今後検証していきたい。

気象記録

令和5年(2023年)1月1日～12月31日

	気温(℃)				
	月最高	月最低	平均		
			最高	最低	平均
1月	15.0	-4.2	9.6	2.3	5.6
2月	20.1	-1.2	11.9	2.4	6.3
3月	25.1	-1.2	19.9	6.2	12.0
4月	30.0	6.4	21.8	10.1	15.3
5月	29.5	6.9	27.1	19.2	22.7
6月	34.2	12.8	27.6	18.0	22.6
7月	39.4	19.7	31.4	23.2	26.8
8月	41.0	25.1	35.1	26.9	30.2
9月	38.8	17.5	31.1	22.7	26.3
10月	28.5	10.1	24.1	12.8	17.7
11月	25.6	4.1	18.5	7.9	12.3
12月	18.2	-2.2	13.2	4.7	8.1

〈参考〉2023年最高気温記録日8月6日 41.0℃
2023年最低気温記録日1月25日 -4.2℃

(西内 良 記)